

第5章

プログラム評価の理論で考える支援プログラム

本章では、第1節でプログラム評価の理論で支援プログラムを見ることについて考察します。第2節では、支援プログラムを論理的に整理できる方法を紹介します。第3節では、「論理的な整理ができるプログラム確認方法」を活用して具体例でプログラムを確認します。

第1節 プログラム評価の理論で支援プログラムを見る

支援者の皆さんは、日々の実践の積み重ねをどのように整理し、次に繋げているのでしょうか。

福祉サービスやそのプログラム評価の研究者である大島巖（2001）は、本来は社会福祉学（理論）とソーシャルワーク（実践）の往来によって互いの深化がなされるとした上で、それらが十分になされて来なかった現状を指摘していますⁱ⁾。また、ソーシャルワーク実践の効果が学際的にも注目されるなかで、実践の理論化や理論検証が今後積極的に行われることへの期待とともに、「みずからの実践をどのように整理し科学化していくか、その実践研究方法を深める必要があるⁱⁱ⁾」としています。個別性の高い福祉現場だからこそ、自らの支援を理論的に検証していくことが求められていると言えます。

P.H.ロッシ（2004）は、プログラム評価が①プログラムのニーズ評価、②プログラムのデザインとセオリー評価、③プログラムのプロセスと実施の評価、④プログラムのアウトカム/インパクト評価、⑤プログラムのコストと効率の評価の5段階で構成されるとしていますⁱⁱⁱ⁾。

これらプログラム評価の5段階における①プログラムのニーズ評価について、大島ら（2001）は、「機能・形態障害、能力障害、社会的不利、および体験としての障害に関わる各種評価尺度のうち、援助プログラムが目標とする内容を積極的に取り入れるとともに、できるだけ多面的な問題把握に努めて生活の全体像が明らかになるように配慮する必要がある」としています。また、利用者自身による自己評価の重要性も報告しています^{iv)}。

また、②プログラムのデザインとセオリー評価について、龍・佐々木（2010）は、仮定に基づくデザインをロジック・モデルで表現し、それを評価すること^{v)}としています。

プログラムを評価するという視点は、アセスメントにより個別具体的な評価尺度を持つものであることが分かります。また、特定の課題に対してだけでなく、その人を取り巻く全体像を把握しようとするのが求められていることも分かります。

プログラムについても、大島ら（2011）は「社会的な問題の解決のために設定する、主に客観的指標で設定される福祉アウトカム指標と、プログラム利用者の希望や思いの実現を捉える主観的指標は、多くの場合相対するものではない。^{vi)}」としています。個別具体的な評価尺度は、結果として様々な社会課題を解決するための指標ともなり得るということです。

このように、プログラム評価の視点を持った上でプログラムを作成することは、自らの支援を論理的に検証することができるだけでなく、社会の課題に対しても有効なデータを積み上げることができるようになります。また、支援プログラムの評価において、プログラム評価の視点は、目標やニーズを把握し、個別のアセスメントにより具体的な項目を盛り込み、その因果関係や繋がりを見ていくこととなります。これらのことから、支援プログラムのロジック・モデルを整理して振り返ることと、プログラム評価を実施していくことは連動していると言えます。支援プログラムのロジック・モデルは、日々の支援が整理でき、見えるかたちで表すことができるため、日々の実践の積み重ねを次に繋げていくことができるものとして活用できます。

第2節 論理的な整理ができる支援プログラムの確認方法

第1項 プログラムの確認方法（作成手順）

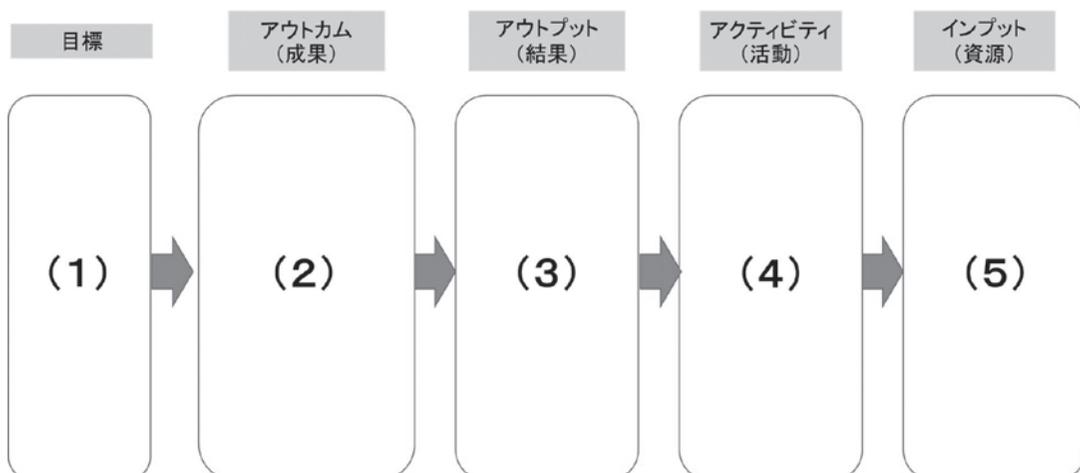
実践の理論化や理論検証となると、敷居が高く感じるかもしれません。

ここでは、ロジック・モデルの考え方を活用し、支援プログラムが簡単に整理できる方法について紹介します。

支援プログラムを確認する手順は、p.16のロジック・モデル作成手順と同じです。①事業の目標と受益者の特定→②アウトカムの設定→③アウトプット、アクティビティ、インプットの設定→④最終確認とすることで作成します。

図29の流れに沿って、各項目を整理していくことで作成していきます。

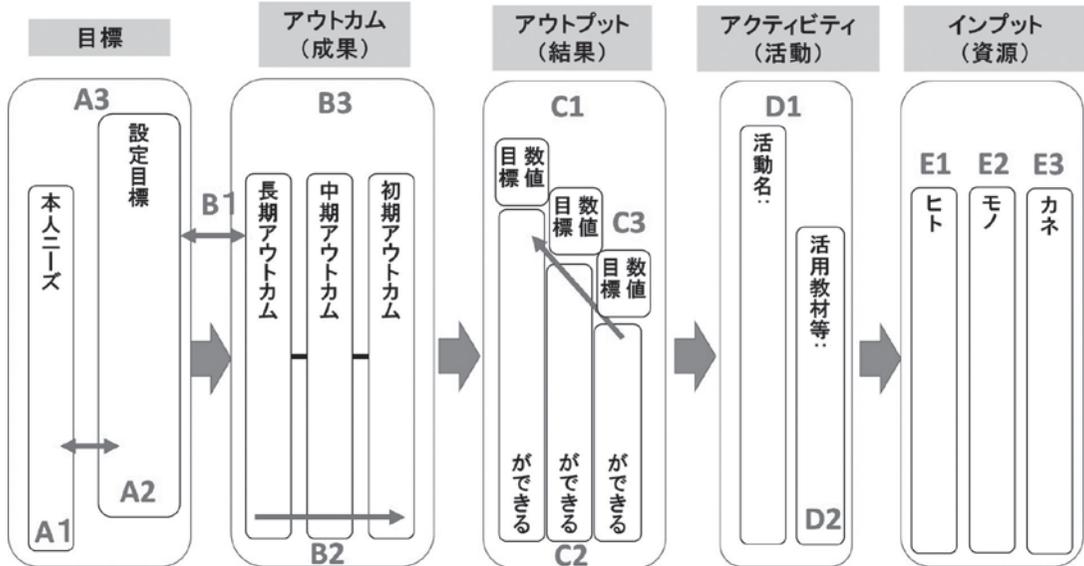
【図29：作成手順】



- (1) 目標の項目は、本人のニーズと設定する目標が連動していることが基本になります。また、事業所がその目標や本人のニーズを支援できるかということも意識して設定することが必要になります。
- (2) アウトカムの項目は、長期→中期→初期となります。しかし、必ず長期→中期→初期という3段階にならなければいけないというものではありません。長期→初期や初期だけという設定があってもおかしくありません。アウトカムとして設定して作成したものを、後で振り返ることの方が重要となります。振り返った際に、アウトプットとして成立しないと判断した際に修正します。
- (3) アウトプットの項目では、スモールステップの過程と数値目標が必要となります。アウトカムに対して設定するアウトプットが困難なものではなかなか達成できないので、スモールステップを意識することが重要です。また、プログラム開発の段階で、客観的に達成度が分かる設定ができればしておく必要があります。数値目標があれば、達成度合いについて誰が見ても判断できるものとなります。
- (4) アクティビティを実施する側（支援者）は、固定されているとは限りません。評価をする際にどのようなものかを他者がイメージすることができるように、アクティビティの記入だけでなく、アクティビティの設定に活用した教材や資料等も示しておく必要があります。
- (5) インプットの項目は、「ヒト・モノ・カネ」の視点で考えます。ヒトとは、活動を実施するための最低人員です。必要な人員を設定する必要があります。モノとは、実施するための物です。部屋や机など大きなものから、筆記用具など小さなものまで設定できると良いでしょう。カネとは、予算のことです。活動を実施する際に必要となるお金についてしっかりと検討する必要があります。

第2項 支援プログラムを整理する14項目

【図30：支援プログラムを整理する14項目】



この項では、前項の作成手順で紹介した整理方法を項目として抽出しました。

図30を参考に以下14項目を確認しながら支援プログラムを振り返ってみてください。

【目標】

- A1：目標が本人のニーズに沿った内容となっているか。
- A2：目標は本人と共有できる設定となっているか。
- A3：支援する上で実現可能な範囲の目標となっているか。

【アウトカム（成果）】

- B1：目標を達成するためのアウトカムとなるか。
- B2：アウトカムの道筋が妥当であるか。（期間設定や長期アウトカムから初期アウトカムへ）
- B3：他のアクティビティとの重複や、因果関係が整理されているか。

【アウトプット（結果）】

- C1：客観的に進捗具合が把握できるようなアウトプットが設定されているか。
- C2：スモールステップで設定されているか。
- C3：数値による進捗ができるものであるか。

【アクティビティ（活動）】

D1：評価が可能なアクティビティとなっているか。

D2：アクティビティの設定に活用した教材や資料があるか。

【インプット（資源）】

E1：実施人員は足りているか。

E2：実施するための環境に必要な物品は足りているか。

E3：実施するための予算は足りているか。

第3節 具体例から考えるプログラム確認（就労支援）

本節では、仮で設定した具体例の支援プログラムをp.57～60の「論理的な整理ができるプログラムの確認方法」を活用して整理します。

確認する支援プログラムは、自立訓練事業の中の就労支援のプログラムの1つです。目標や活動名と内容、本人ニーズについては下記のように設定されています。それ以外の情報については、明記されている状態ではありません。

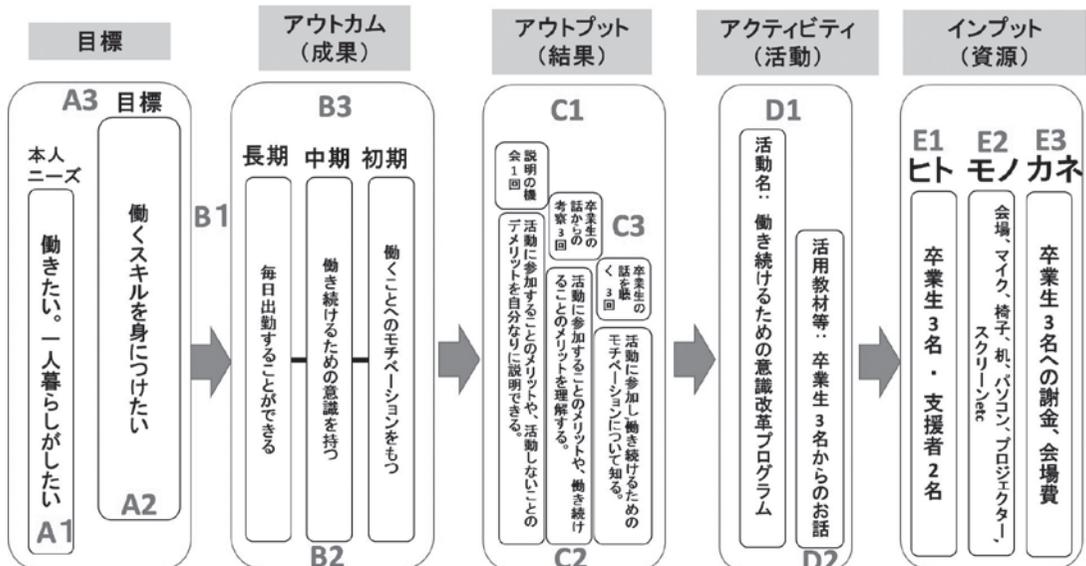
この状態から、「論理的な整理ができるプログラムの確認方法」を活用していく過程を確認していきます。

【例】

事業：自立訓練事業（定員10名）
活動名：働き続けるための意識改革プログラム
活動内容：卒業生の実体験を聞く（活動に参加し続けて、卒業していくまでの実体験）
利用者Yさんのニーズ：働きたい。一人暮らしがしたい

図31は、本例の支援プログラムを「論理的な整理ができるプログラムの確認方法」の書式にあてはめたものです。

【図31：就労支援のプログラム】



【目標】

まずは、目標の項目（A1～A3）から確認をしていきます。A1は、目標が本人のニーズに含まれた内容となっているかを意識することが必要です。設定された目標が、自分の目標であると捉えられることが前提となります。A2は、目標が本人と共有できる設定であるかを確認することが必要です。本人の特性に配慮して共通言語を持って分かりやすく伝えられているか問われています。どうしてこの目標設定にしているか、どのようにこの目標にむけて取り組もうとしているか、本人にわかりやすい表現を心がける必要があります。A3は、支援する上で実現可能な範囲の目標になっているかを意識して確認することが必要です。事業全体のロジック・モデル（全体図）があると、それぞれ支援プログラムのロジックを把握しながら、プログラムを設定していくことができます。

本例で確認すると、Yさんのニーズは「働きたい。一人暮らしがしたい」ということです。これは事前の聞き取りで、自立訓練事業がもつ機能を確認し、「働き続けられるスキルを身につけたい」という目標と、「働きたい。一人暮らしがしたい」という本人ニーズとの関係を意識した上で目標を確定します。

【アウトカム（成果）】

次は、アウトカムの項目（B1～B3）です。アウトカム項目はプログラム作成において重要な要素であり、論理性が特に求められます。各アウトカムのつながりを意識しながら設定することが必要です。

本例で確認すると、目標の「働き続けられるスキルを身につけたい」を達成するためのアウトカムの道筋を、「働き続けられるということは、毎日出勤する習慣が必要である。→毎日出勤する習慣を持つには、働き続けることを意識する必要がある。→働き続けることを意識するには、働き続けるモチベーションを持つ必要がある。」と上位から下位への流れを意識して確認します。このことにより、ここでは長期アウトカムは「毎日出勤し続けることができる」、中期アウトカムは「働き続けるための意識を持つ」、初期アウトカムは「働くことへのモチベーションをもつ」と確定しました。

【アウトプット（結果）】

次に、アウトプットの項目（C1～C3）です。C1は、進捗具合が客観的に把握できるようなアウトプットを設定する必要があります。また、C2は、スモールステップで設定されるように意識する必要があります。ここでは、「本人にとって無理のないアウトプットを設定すること」「本人がアクティビティをとおして、達成できる項目を確認しやすくすること」が求められています。C3は、数値による進捗ができるものであることを意識していくことが必要です。進捗管理は本来数値による客観的指標が求められます。回数や数値目標が設定できるものであれば設定し、数値目標を達成したという結果の進捗が客観的に分かる必要があります。本例で確認すると、初期アウトカム「働くことへのモチベーションをもつ」を達成するためにどのようなスモールステップがあれば良いかを検討することからはじめます。支援現場で設定しているスモールステップの計画を確認し、ここでは「活動に参加し、働き続けるためのモチベーションについて知る」→「活動に参加することのメリットや、働き続けることのメリットを理解する」→「活動に参加することのメリットや、活動しないことのデメリットを自分なりに説明できる」と設定しました。また、数値目標の設定を、「卒業生のお話を聴くことを3回」→「卒業生のお話からの考察を3回」→「説明の機会1回」としています。数値目標はあくまで目安として設定しています。設定した数値は、その時点での水準となります。活動の進捗を振り返る際に設定した回数の修正が必要という振り返りがあれば、修正をしていくこととなります。

【アクティビティ（活動）】

次は、アクティビティの項目（D1～D2）です。D1は、アクティビティが評価可能なものかを確認します。D2は、アクティビティの設定に活用した教材や資料を記載します。プログラム作成者がアウトプットのスモールステップを達成するために用いた手段が分かるように示す必要があります。アクティビティの設定の際には、アウトプットのスモールステップが達成できるかを意識しながら設定します。

本例においては、活動名が「働き続けるための意識改革プログラム」、内容については、「卒業生の実体験を聞く（活動に参加し続けて、卒業していくまでの実体験）」と実施している内容を確認ができます。活用教材等については、「卒業生3名からのお話」となります。

【インプット（資源）】

最後にインプットの項目（E1～E3）です。E1～E3は、アクティビティを実施する際の資源が足りているかを、ヒト・モノ・カネの視点で確認します。

本例において、実施状況を確認します。ヒトの視点で確認すると「卒業生3名」と利用者規模から「支援者2名」の体制で整理ができます。また、物品については会場やマイク、机といった必要な物品の設定を確認します。予算については、卒業生3名への謝金や会場費が必要になることを確認します。

以上の確認をとおして、本例の支援プログラムを論理的に整理しました。これは、ロジック・モデルの考え方を活用した整理方法となります。プログラムの作成者の頭の中では、これらのプログラムの一連の流れが整理された状態であるものと思います。しかし、プログラムを実施する担当者が、プログラム作成者であるとは限りません。プログラム作成者は、作成したプログラムがどのようなロジックであるかを明らかにしておくことで、誰がプログラムを実施することになっても作成の意図やねらいを共有することができます。また、プログラムを実施する担当者は、「どのような成果を求めているか、期待するスモールステップの進捗はどのようなものか等」のロジックを読み解くことで、より有効にプログラムを実施することができます。

-
- i) 大島巖他編（2001）『障害福祉とソーシャルワーク』 p.308
 - ii) 大島巖他編（2001）『障害福祉とソーシャルワーク』 p.308, 1.15
 - iii) P.H.ロッシ他著（2004）『プログラム評価の理論と方法』 p.77
 - iv) 大島巖他編（2001）『障害福祉とソーシャルワーク』 p.61
 - v) 龍慶昭・佐々木亮（2010）『政策評価の理論と技法』
 - vi) 「プログラム評価理論・方法論を用いた効果的な福祉実践モデル構築へのアプローチ法開発」2010年報告書

